

名作歌謡全集

6

夏祭浪花鑑 国訛嫩笈摺
双蝶々曲輪日記 生写朝顔話
閑取千両幟 壺坂靈驗記
艷容女舞衣 廓文章 鰻谷

桂川連理柵
碁太平記白石噺
新版歌祭文
近頃河原の達引

昭和

東京創元新社

昭和四十四年三月十日 発行

全集伎舞歌作名

第7巻 丸本世話物集

監修者

山本二郎
戸板康二
利倉幸一
河竹登志夫
郡司正勝

発行所 株式会社

東京創元新社

代表者

秋山孝男

(162) 東京都新宿区新小川町一―十六
電話 (〇三) 二六八―八二三―一
振替 東京 一五六五

印刷・株式会社 金羊社
製本・株式会社 鈴木製本所
用紙・株式会社 富士川洋紙店
写真版・(株)興陽社、(株)方英社

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

目次

(名作歌舞伎全集第七卷 丸本世話物集)

夏祭浪花鑑

(夏祭)

.....

(装置図

八木恵一)

.....三

双蝶々曲輪日記

(双蝶々)

.....

(装置図

釘町久磨次)

.....五

関取千両幟

(千両幟)

.....

(装置図

萩原勝美)

.....二九

艷容女舞衣

(酒屋)

.....

(装置図

萩原勝美)

.....三元

桜罽恨鮫鞘

(鰻谷)

.....

(装置図

萩原勝美)

.....五

桂川連理柵

(帯屋)

.....

(装置図

萩原勝美)

.....一七

碁太平記白石噺

(白石噺)

.....

(装置図

萩原勝美)

.....三三

新版歌祭文（野崎村）……………（装置図 高根宏浩）……………三三

近頃河原の達引（堀川）……………三七

国訛嫩笈摺（どんどろ）……………（装置図 釘町久磨次）……………二九

廓文章（吉田屋）……………（装置図 萩原勝美）……………二九

生写朝顔話（朝顔日記）……………（装置図 高根宏浩）……………三一

壺坂靈験記（壺坂）……………（装置図 高根宏浩）……………三九

解説

校訂について

戸板康二
山本二郎

写真と資料提供―演劇出版社、演劇博物館、大谷図書館

梅村豊

夏^{なつ}

祭^{まつり}

浪^{なみ}

(夏 花^わ)

祭^{まつり} 鑑^{かがみ}



夏祭浪花鑑

戸 板 康 二

延享二年七月十六日初日の竹本座に初演された浄瑠璃。
ナツマツリナニワカガミである。作者は並木千柳、三好松
洛、竹田小出雲。

団七九郎兵衛、釣船三婦、一寸徳兵衛という、いずれも
大坂の俠客の達引を書いたものである。

団七という人物は、初代片岡仁左衛門が元禄十一年に、
大坂片岡座で「宿無団七」というものを演じており、これ
も実説を脚色した芝居らしいが、くわしい内容はわからな
い。

「撰陽奇観」によると、その前年の冬、堺の魚売りが賭場
の争いで長町裏で殺人を犯し、死骸を雪の中に埋めて置い
たのが、翌春までそのままになっていて、雪解の時に発覚
した事件があったのをとり入れて、すでに前記「宿無団

七」に出て来た団七、三婦、徳兵衛の筋と結びつけたもの
のようである。

九冊物だが、普通歌舞伎では、三冊目の「住吉」、六冊
目の「三婦内」、七冊目の「長町裏」、八冊目の「団七内」
を上演する。しかし、その中では、団七内が比較的上演率
がすくなく、長町裏で終る場合が多い。

この浄瑠璃にも玉島磯之丞という若旦那が出て来る。発
端からして、悪者にそそのかされ、放蕩三昧にふける意志
薄弱な二枚目である。彼は堺乳守の遊女琴浦と馴染み、の
ちに団七が世話して奉公させた大坂内本町の道具屋の娘と
恋仲になり、道行にまで発展する。つまらない男だ。

しかもそんな磯之丞のために、団七はじめ大勢の者が苦
勞するのは、現代人から見ると奇妙なことであるが、御家
狂言の性格としてこういうプロットは一つの類型であるか
ら、やむを得ない。

序曲はお鯛茶屋で磯之丞や悪人の大鳥佐賀右衛門が「頼
光跡目論」の浄瑠璃狂言をまねて遊んでいるところではじ
まる。そこへ奥方のうちかけを借りて着た団七の女房のお
から（歌舞伎ではお梶）が来て、あらかじめたのんでおい
た乞食の徳兵衛に自分の零落のいきさつを身の上話でしや
べらせ、磯之丞は急に反省して帰る。

二冊目は和泉浜田の藩邸で帰って来た磯之丞が父兵太夫

から勘当になるところと、おかちと息子の市松が懇願して、団七が翌日の赦免をみとめられるところである。兵太夫の性根が、よく書けている。

とんで四冊目は大坂内本町の道具屋で、磯之丞は清七と名のつて手代になり、娘のお中と仲よくなっている。団七の舅の義平次が武士にばけて来て、悪手代の伝八、仲買の弥七と共に謀して清七から金をかたりとるので、清七は、弥市を切つてこの家を去る。お中もあとについて行く。団七がにせの武士に会うくだりは「天網島」の河庄のくだりに似ており、かたりの筋は後年の「近頃河原の達引」に暗示を与えているようでもある。

五冊目は「道行妹背の走書」で、安居の森まで来たお中と磯之丞が死のうとするとところに三婦がかけつけ、あとから来た伝八は、お中にはかられて首を吊つて死ぬ。この伝八は悪人だが、チャリになっている。

またとんで九冊目は備中玉島の徳兵衛内に磯之丞も団七もかくまわれている。そこへ浜田の重臣介松主計が来て、お家の重宝千手院力王の刀紛失着服の嫌疑で磯之丞を捕えるが、そこへ来た佐賀右衛門が刀の盗賊と判明、母と三婦につれられて来た市松が父親に縄をかけて、形式だけ親子の縁を切り、団七の舅殺しの罪が軽くなるように主計がはからうくだりがあつて終る。

さてこの作の主人公である団七は、まず着ている帷子の団七縞が、印象的である。三婦の内では、徳兵衛も同じ縞を着て出て来るが、団七は柿色、徳兵衛は藍の、同じ柄で出るので。

徳兵衛はもと乞食だったのを、磯之丞を意見するため、お鯛茶屋の場面で、団七の女房お梶が特にたのんで、金を渡したという縁がある。

その後、住吉で団七と琴浦を身請けしようとしている大鳥佐賀右衛門にたのまれた徳兵衛とが争う所へ、お梶が顔を出すと、徳兵衛が急にしょうげてしまうのは、そういういきさつがあつたからなのである。

この日、佐賀右衛門の下郎と喧嘩したため入牢していた団七が、住吉の鳥居前で、赦免になる。獄衣を着て、髪もひげもぼうぼうと伸びた団七が来て、三婦に迎えられ、髪結床にはいる。そこへ来合わせた琴浦を、佐賀右衛門が追いまわしている所へ出て来る団七は、「剃立の、糸びん頭青月代」の首ぬきの浴衣の姿で、さっぱりとしたい男になっている。前後の照応が、はっきりして面白い演出である。そのために、前のほうはことさらに汚いつくりにして、毛虫のような眉をつけたら、皮膚病になった心で身体を搔いて見せたりする型がある。

三婦もここでは、特に洒落っ気のある老人にしてあり、

「どこからでもない、床からだ」といつてのれんのかげから出て来て、以後、奥へ入った団七に赤旗（赤いふんどし）を手繰りながら貸す所や、そのあと、花道へ行きかけ、裾をまくろうとして前を隠す所などで笑わせる。これはみな、歌舞伎の入れ事である。

また佐賀右衛門をおさえながら、団七が琴浦に昆布屋へゆく道を教える所で、相手の身体を松の木や橋にするのは「花水橋」（先代萩）はじめ、始終つかわれる常套的な型である。徳兵衛と団七のタテは、床几と傍に立っている開帳札をつかったはでな立ち廻りで、とめに入ったお梶が辻札の「曾根崎心中」の絵看板でおさえるのが型だ。

次の三婦の内は、高津の祭礼の宵宮の季節感がよくかかっている。三婦の女房が門口であじを焼いている。鉄弓の上の魚の油から、煙が上っている辺りに、六月十一日の大坂の油照りが思われる。三婦の女房、原作は名がないが、歌舞伎では、普通、おつぎとしている。

その暑さの中へ、徳兵衛の女房のお梶が、涼しい風が日ざかりの町を吹きすぎるように、あらわれる。初演の人の時には吉田文三郎がお辰をつかい、それ以来「桔梗の帷子、黒じゅすの前帯、浅黄の綿帽子」というのが、歌舞伎にも輸入された扮装で、「浄瑠璃譜」には、「今に歌舞伎にても（略）何かを着れば、お辰のように見えぬ不思議」

とある。今は、黒の帷子だが、日傘をさした二十六、七の女房の夏姿は、美しい。

三婦のこしらえは、はじめ大柄の浴衣、のちに竜をかけた着附に替る。これは、三婦にはむかしから彫物（刺青）がなく、その代り彫物と同じ効果のこういう衣裳が用意されているらしいのである。（三婦に彫物がないのは、長町裏の団七が裸になって彫物を見せるからであり、それを引き立たせるため、今は改心して堅気になっているが若い頃は乱暴を働いたにちがいない彼に当然なくてはならぬ彫物をやめさせたのであらう）この三婦の姿にも、大坂の夏がある。獅子をかついで飛び込んで来る、こっぱの権、なまこの八にも、江戸の夏祭にはない郷土色がある。

その季節感をたたえた鉄弓が、お辰によって、玉島まで磯之丞をつれて帰ることを三婦に許して貰うための手段として、美しい顔にあてられる。この重要なしどころがあるために、「夏祭」では、お辰に扮するのが立女形で、お梶が二枚目の女形の役になっている。

お辰の心意気には、女の俠客といった気分もあるが、しかしやはり伝法になりすぎることは戒めなければならぬ。お辰が茶のこぼれた盆に、火傷を負った頬をうつして見たあとで、その盆を畳について三婦を見上げるきまりがあり、盆という小道具がよく活用されている。そのお辰を見

て「辛い女房の言葉の山椒、茶びんあたまを動かする」で、三婦がうちわで蠅を抑えるのも型だ。

なおこの三婦はさぶ、即ち三郎という名の略称で、原作では三ぶとなっている。名前を通称で呼び合う階級であることが、そんなことでわかる。

ここで断っておきたいのは、作中の団七、徳兵衛等の身分がごく低いことである。上方の方言でいうち、即ち巾着切に類したならず者というのが、原作の選んだ境遇なので、俠客めいてはいても、江戸の幡随院長兵衛などとは、まるで格がちがうのである。住吉で徳兵衛が、団七に対して権と八に喧嘩をしかけさせながら、床几で毛抜にひげを抜かせているあたりは、世話で行く「菊畑」の智恵内で、いい気持そうな演出だが、立者がつとめて来たために、これらの人物が原作の感じよりも、よほど男前にみがかれているという点だけは、注意したいのである。

三婦の内の季節感、そのまま長町裏へつづく。団七自身も、おつぎから、義平次の駕が琴浦を乗せて行ったと聞いて駆け出そうとしたはずみに、相手の脇腹を当て、倒れたおつぎに葉の入っている煙草入れを投げ、雪駄を帯のうしろにはさんで花道をかけて入る所から、次の花道の出まです、ずっと気持が充実したまま、継続していなければならぬ。

なお、ここで煙草入れを投げるのは、履物のまま内へはいることが出来ないからなので、団七の焦慮をあらわすわけなのだが、大阪で先年見た「夏祭」では舞台を半まわしにして、このくだりを往来に見せたので、緊迫感がそがれ、全然無意味になってしまった。型の由来する経路を考えないと、こういう誤りをおかすのである。

長町裏では、団七の出の「渡り拍子」の鳴物から、段々に主人公と共に観客の気分が興奮してゆく過程が、よく計算されている。原作は「忠臣蔵」より三年早い、この義平次と団七のやりとりは、歌舞伎の方は、世話の師直・判官のつもりで演じる。どうしても、団七が刀を抜かずにはいられないように手順が出来ている。

殺し場では、夕顔の花のからんだ生け垣の所を、よろばいながら義平次が逃げ、団七がそのあとを追う凄惨を極めた演出がある。団七は義平次の手で帷子を脱がされ、彫物を見せた姿になったあと、裸の見得をいくつか見せる。この二人もしくは一人の型の中で、義平次が井戸のつるべ竿につかまり、下手の団七が下にいる形、義平次の襟髪をつかんだ団七が刀をふり上げた形、義平次を泥田につきおとして上から団七が刀を肩ににらみおろす形などは約束で、さらに最後のとどめの所で義平次をまたぎ、太鼓に合せ、顔を見せたり背中を見せたりしながら刀を持ってポーズす

る「見得のための見得」は、正に絵画的な美感を極致まで押しすすめたもので、人形の方でも「団七走り」というテクニクを中心に、動きの多い演出があるが、とても歌舞伎には及ばない。

なお、裸体でいる団七だけに、この役は体格のいい俳優に限る。彫物は昔はなかったようだが、これは今となっては、欠くべからざるものになってしまった。

この殺しの進行中に、向うの板塀の外を、高津祭りの灯入りの山車の通るのが見え、祭りの賑やかな囃子が、舞台の惨虐な場面の伴奏をつとめるのは、人生というものを象徴しているようで、巧妙な点景である。

義平次はとどめを刺される前に、一度舞台の前もしくは切穴にしつらえた泥舟の中に入り、泥だらけになって這い上がる。そして蛙のまねをする型などがある。ために、この場を「泥場」と芝居の方では呼んでいる位だ。いく人かの作者の書き替えた「女団七」も殺しの所の、団七縞のお梶と、義平次婆アの動きは、泥舟の設備をもふくめて、全く同じ演出で行われる。

義平次を殺した団七が、井戸の本水で身体を洗い、刀をさがりにさし、その上から帷子を着こんで、ちょうど出て来た神輿の若い衆のさげている手拭をとって、煩かぶりをし、人群にまぎれて花道に入る所も、段取りはよくついで

いる。祭りの囃し方に、大阪の芝居では「ようさや、ちようさ」、東京の方では「わっしよいわっしよい」という風なちがいがあるのは、いうまでもない。

引つ込みの時、団七が義平次の死骸を始末した泥舟の前で、うなだれ、うちわをとり落し「悪い人でも舅は親、ゆるして下んせ」と拝む所は、昂揚しきった気分の間に、短い小休止が挿入されているのだ。すぐれた手法だと思う。

義平次と徳兵衛とをかわる事がよくある。その時には、殺し場の途中から、義平次は「吹き替え」をつかい、早替りで幕切れに出て来て、団七の雪駄を拾うのである。むごたらしく殺された役の俳優が、もう一度美しく扮装して登場することは、昔の歌舞伎の定石でもあったのだ。

団七の内では、徳兵衛が、団七を舅殺しの汚名から救うために、わざと自分の帷子のほころびを縫ってくれてはお梶に不義をしけることがある。これは後年鶴屋南北の「謎帯一寸徳兵衛」に流用されている作劇上の技巧である。この場面は、徳兵衛の「蚤とった」のセリフから、俗にのみとりといわれている。

団七系の狂言としては、その後につづくものが多い。何しろはじめて人形に帷子を着せたというこの淨瑠璃の好評（人形のかしらに「団七」が出来たこともつけ加えておこう）から、ただちに歌舞伎化され、初演の翌日京都の都万

太夫座、十二月には大坂の三座で競演されている。

さらに明和五年に、当時喧伝された岩井風呂の湯女殺しから並木正三の脚色した「宿無団七時雨傘」は、魚売りの団七を主人公にしたもので、ここでも団七編が重要な働き方をしている。文化八年の南北の「謎帯一寸徳兵衛」も、役名は全部「夏祭」から借りており、更にその筋の一部は文政八年、同じ作者の書いた「東海道四谷怪談」にも採用されている。

団七を女にした、いわゆる「女団七」の芝居は、寛政か

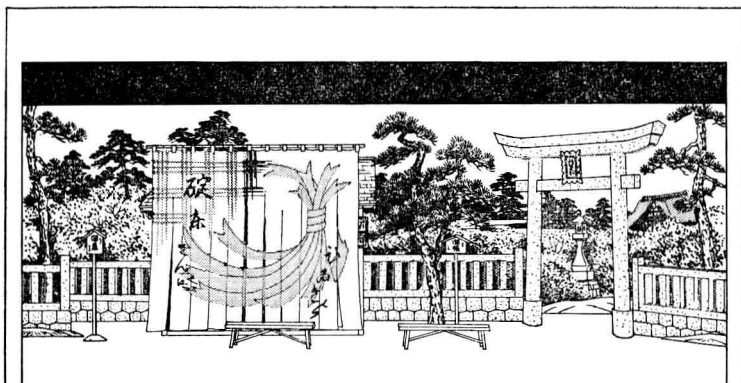
ら明治まで五種類の脚本になってあらわれているが、現行のものは、三代目 桜田治助の台本によっているようである。

「双蝶々」も「夏祭」も、上方色の濃いものだけに、やはり大阪の俳優によって演じられるほうが適切である。そんなところに、これらの作品の特色があるともいえる。

丸本の団七、正三の「宿無団七」ともに近年では、二代目 実川延若の持ち味をじゅうぶん發揮する傑作であったのは、決して偶然ではない。



お辰 四代目 沢村源之助



住吉鳥居先の場

序幕

住吉鳥居先の場

役名 団七郎兵衛 一寸徳兵衛 釣船の三婦 役人
堤藤内 玉島磯之丞 こっぱの権 なまの八 大鳥佐賀
右衛門 団七女房 お梶 同俣 市松 遊女 琴浦。

本舞台、少し上手へ寄せて、誂えの髪結い床、上の方石の鳥居、同じく駒寄せ、石垣、石燈籠、床に続いて下の方草土手、これへ松の並木、下の方に葎簀張りの居酒屋、模様物の掛暖簾の入口、よきところに紅葉の立木、同じく若葉の吊枝、すべて住吉浜辺、明神鳥居先の模様。こゝに町人仕出しの中へ、役者、力紙附きし朝比奈のかつら、浴衣形、医者、坊主かつらにて、役者に引き附けて居るを、髪結い取り支え居る。ほかの仕出し、思いくの拵えにて留めて居る。辻打ちにて幕あく。

役者 この医者坊めが、おれに恥をかゝせやアがったな。

医者 ヤイ、この赤村へ、へた蔵めが恥をかゝせたもよく出来た。おのれが癩癩を起こすたんびに、服ませてやッた氣附け薬の代ばかりも、いくら溜まって居ると思ふ。その薬代の催促をすれば、ふて勝手を吐かしやアが

る。料簡^{りょうかん}がならぬぞく。

ト立ちかゝるを、町人皆々^{ちやうじん}とめて、

町皆 マアく、待ちなさいく。

役者 コレく、お前方は、打ッちゃって置きなさい。葉代の掛取りに廻る医者^{いしや}が、どこの国にあるものか。この竹の子坊主め。

医者 ナニ、竹の子坊主だ、この盗人^{ぬすづこ}朝比奈め。

役者 盗人とはなんの事だ。

医者 そのいけ口を、どうするか。

ト町人皆々^{ちやうじん}とめるを払い退け、役者の横つッぽをくらわせる。

役者 アイタ、うぬ、ぶったなく。痛えく。目玉が飛び出たぞく。

髪結 コレサく、マアくお前も、お腹も立とうが、お医者様とあれば、人を助ける長袖^{ながそで}の事じゃアござりませぬか。

トよろしく留める。

町皆 マアく、御料簡なされませ。

医者 なんの長袖^{ながそで}どころか、もうこうなつては、筒ッぽでも絆^{はん}纏^{でん}でも、薬礼^{ぐすりれい}を取らにヤアならねえ。

役者 骨^{ほね}が舍利^{せり}になるとても、薬代はやらねえぞく。
医者 取らねえで置くものか。

ト兩人争いながら、辻打ち早めて、上の方へ、掴み合いながら鳥居の内へ入る。

町皆 こいつア、大笑いだ。

ト右の鳴物にて、仕出し皆上下へ入る。髪結いは床^{とこ}の中へ入る。と詠えの出の鳴物になり、花道より、釣船^{つりふね}の三婦^{さんぷ}、好みの着附け、尻はしより、石割^{いしわり}り雪駄^{ゆきだ}、数珠^{ずしう}を爪^{つま}ぐりながら先に立ち、この後より団七女房お梶、好みの着附け、後ろ帯、俣市松の手を引き出て来り、三婦花道にて市松へこなしあつて、

三婦 ヤアく、小びつちよめが、冗談歩き、附き合つて来たかして、思いのほか早かつたわえ。

お梶 ほんに、そうでござんすなア。コレ坊^{ぼん}や、サア、おとなしく歩きましようぞ。アレく、向うが住吉様の鳥居先。

三婦 アレ、あの鳥居を潜つて、それから行くと、反橋^{さうり}があるぞ。

お梶 今少しじゃ、あんよしやよ。

市松 アイく。

ト右の唄にて、舞台へ来り、

三婦 ア、おとなしいく。

お梶 サア、こゝまで来れば、ちよつとこゝで休みましよう休みましよう。三婦^{さんぷ}さんも休みなさんせえ。

トこれにて床几を見て、

三婦 オ、サ、幸いのこの床几、ちょっと腰を休めようかい。

トこなしあつて床几へかける。右の合方、辻打ちの鳴物をあしらい、市松へこなしあつて、

さて坊主は、よう歩いたの。おおかた天下茶屋あたりで、たしかに駄々きょうと思うて、二十五文が駕籠、相乗りで振る舞うところを、三文の地黄煎玉でまじのうた。サア／＼、ぼんちもこゝへ休め／＼。

トお梶も市松も、よろしく床几へかける事あつて、

昨日、こなたが戻つて、団七が牢から出ると聞いたゆえ、おれはモウ嬉しゅうて、夜がな寝られず、夜の明けるまで待ち兼ねた。

お梶 そりゃモウ、お前の言う通り、わたしも昨日お役所へ出るまでは、もしも命にも及ぶような、御裁許になりはせまいかと、大抵や大方案じた事ではないが、案じるよりは産むが安いと、今日はお許しが出ると聞いた時のその嬉しさは、どのようだと思ひなさんす。これというも三婦さんはじめ、御近所の衆の勢力でござんしょう。ありがとうござんすわいなア。

三婦 オ、さだめし嬉しかろう／＼。コレ坊よ、追ツつけ父に逢わしてやるぞ。嬉しいかく。

市松 アイ、父様に逢うのは嬉しい／＼。

三婦 オ、そうであらう／＼。イヤ、したが、もっと隙が入ろう。祝うて明神様へ、お礼がてら連れて参らつしゃれい。

お梶 ほんに、ちょっとお礼参りして、来ましようわいなア。

三婦 おれは間違いないように、こゝに待つて居ようわ。

トお梶、市松を連れて立ちかけ、こなしあつて、

お梶 それにつけても三婦さんは、こちらの団七どのと念頃な仲じゃとて、いかい世話でござんすなア。

三婦 なんのいのう。しかし言われて言うじゃなければ、一体はこなたの親父、三河屋の義平次が来てやらないならぬ筈を、今日は又なせ来ぬの。

お梶 さいなア、今朝から腰が痛いと言うて。

三婦 サア／＼／＼、作病じゃて。ことに直ぐにもない和郎じゃもの。イヤ、こんな事は誰も来ともながる。ママ、参つてござれ。

お梶 アイ、そんならそう致しましょう。そんなら、三婦さん。(ト思入れあつて)ドレ、参つて来ようわいなア。

トお梶、市松の手を引き、上の方へ入る。

三婦 ドリヤ、一服やろうわえ。

トこれより竹本になり、

へ親子は宮へ、三婦は火打石に腰かけすっぱく、
茶の錢始末と見えにける。

トこのうち、提げ煙草入れより、火打ち道具を出し火を
打ち、煙草をのみ居る。この時下座の囃子になり、花道
の揚幕より駕籠を昇き、こっはの権、なまの八、磯之丞
を乗せ出で来り、よき所にて息杖を突き、

権

オイ棒組、ちよつと入れようぜ。(ト駕籠を立て)エ
モシ旦那、後の立場の駕籠と、替えにヤアなりませ
ん。駕籠の錢を、

兩人 やって下さいまし。

磯之 これは又どうしたものだ。乗る時に大坂までと極め
たではないか。先へ行ったら渡そうわいの。

八 それじゃアちつと、勝手が悪うございますよ。

権 後の駕籠と替えねばなりませんから、

兩人 どうぞこゝで、やって下さいまし。

磯之 サア、やる事は易けれども、錢をこゝに持ち合わせ
ぬゆえ、大坂へさえ行ったなら、たしかに渡そうわい
の。

八 コウ相棒、聞いたかえ。なんだか、あやふやな物言
いじゃアねえか。

権 その事よ。(トこなしあって)モシ旦那、今受け取ら

にヤア、どうも勝手が悪うございますよ。

八 そうして大坂は、

兩人 どこへ行くのでございますえ。

磯之 されば、長町辺で尋ねて見たら。

八 先は知れぬと言うのは。

権 それじゃア、いよくこゝで渡して、

兩人 貰いとうござりやすね。

磯之 ハテ、しつこい。こゝには錢がないというに。

八 ナニ、錢がない。おきヤアがれ。値をきめて駕籠へ
乗りながら、

権 こゝまで仕事をさせておいて、錢がねえもよく出来

た。

八 おら達を騙りヤアがるなく。

トこのうち駕籠を下ろして、左右よりがなり立てる。磯
之丞こなしあって、

磯之 ア、コリヤ、武士に向かって飽相申すな。

八 なんだ、武士に向かって飽相もねえものだ。

権 ヘン、武士もよく出来た。

兩人 見れば、丸腰じゃアねえか。

磯之 エ。

ト丸腰に心付き、ぎっくりこなし。

八 それで騙りは解つて居るわえ。

権　こんな奴は見せしめに、
兩人　こうしてくれるワ。

へ思い合うたる悪者同士、駕籠をくりりと打ち返され、内より出たる磯之丞、落ちたるはずみに、膝すりむき。

ト兩人にて駕籠を返す。中より磯之丞ころげ落ちる。

磯之　アイタ。こりや、わしをばどうするのじや。

へくわつと急ぐ氣も身の恥と、差し俯向いて堪え居る。

トよろしくこなしあつて、

権　コレ先棒、錢の持ち合わせがねえと言つて、このままでは済まされねえ。

八　知れた事よ。なんでなりと、こゝまでの駕籠賃を取らねえでなるものか。

権　下着でも上着でも剥いで、錢にするがいゝ。

八　そうしべいゝ。

磯之　すりや、手籠めにしても、駕籠代を。

兩人　オ、知れた事だア。

ト立ちかゝるを磯之丞、ちよつと払い退けるを、また兩人かゝる。これを三婦ツカ／＼と出て、磯之丞を囲い、

兩人を見得よく留めて、

へ立ちかゝらんとするところを、三婦は見兼ねて割

つて入り、
三婦　コリヤ／＼。めったな事をして、後で後悔しやアが
るな。

へ横合いから三婦が声。

ト兩人の駕籠昇き、こなしあつて、

八　エ、この爺め、何を巾をきかせるのだ。

権　なんの訳も知らねえで。

ト詠えの鳴物になり、

三婦　ホ、知つて居る／＼。コリヤいがむなやい。サア

サア、足許の明るいうち、とつ走らいでナ。

ト兩人、よろしく思入れ。三婦は磯之丞へこなしあつて、

イヤ、見れば様子がありそうなお方。お年は若いがおとなしい、よう堪忍さっしゃるぞ。して、駕籠代はなんぼ
じゃの。

ト磯之丞、面目なきこなしにて、

磯之　サア、ちと様子がござりまして、着のみ着のまゝで
走り出で、わずかの鳥目に差し支えをお目にふれ、面目
もござりませぬ。極めました駕籠代は、二百五十文でござ
ります。

ト氣の毒そうに言う。

三婦　ア、二百五十文か。ても高い駕籠じゃの。乗らし